



一つの新聞記事から

多田鉄雄

三月九日付の東京朝日新聞紙上に「ウブ声あげた保育園」の見出しで、写真入りの記事があつた。それは戸山ヶ原の集団住宅地で住民の協力により新たに園舎が新築されたことを報じたものである。事の起りは、こゝの住民が「一番困つたのは子供たちの問題だつた。住民に教員や警察職員の多いこゝでは、子供の教育に深い関心をもつていたばかりでなく、内職しなければ生活の苦しいお母さん達にとつても小さな子供を預つてくれる施設がほしかつた。この切望にこたえて一昨年十月住宅組合事務所で保育園をはじめたところ、園児はどんどんふえ、隣りのりつばなアパート住宅の子供も来るようになった」のであり、そこで今度は新園舎をもつまでになつたのである。

このような施設が幼児のために生れて来ることを心から喜びながら、私はこの記事を読んで又あらためて考えさせられるのである。

この保育園というのは児童福祉法による保育所なのであるか、それとも保育所と云わないところに何か意味があるのか。勿論たゞ名称だけのことなら——その場合でも突込んで吟味して行くと、何故に正規の保育所なる名称を避けたかとか問題はあつるが——こゝで採上げるほどのことではないにしても。

教育に関心を持つ親達が、何故幼稚園をつくらずに保育園をつくつたのであろうか。幼稚園をつくらうと思わなかつたのか——幼稚園なんでものは特殊の階級のもののためにあるにすぎぬとか、大衆的でないとか、幼稚園の使命など重視する要はないとかで。それとも何等かの理由でつくるのをやめたのであるか——幼稚園の設立は手続きが面倒であるし、条件もやかましいとか、幼稚園では自分達の希望する施設にはなり得ないとかで。

現在のわが国の社会では実際には、一方に幼児の教育に関心をもつ親達のため、一方に父く母達のためと、こ

の双方を同時に満足させる施設が要望される場合が一番多いのではあるまいか。更にこうした施設をつくるのであれば、この記事にあるような保育園でゆくより仕方ないし、又その方が色々便宜があるのではあるまいか。然し果してそれでよいのであろうか。

このような問題にぶつかると、私はすぐ正規の高等学校へ進学出来ない青年大衆のための定時制高等学校が、その形式性の故にうまく運営が出来ず、或は青年学級とか、職場内教育施設の要求となつて来ている事情を聯想する。

幼稚園と保育所の問題は、むしろ返し返し論ぜられながら、未だに何の眼鼻もつかない実情である。眼鼻がつかないだけでなく、これは放置すれば益々悪い条件が次々と増して行くのである。

先づこの記事のような法規上から見れば極めてあまいな性格の施設がどんどんつくられて行く実情である。又、最近には、国公立の幼稚園、保育所関係者が協力して各々の立場を堅持しながら共通の問題、今後の問題を研究し、解決して行くことを主要な目的の一つとする日本保育連合会が、一部から無用視されたり、邪魔物扱いにされたりして、一部団体からの脱退論、解散論が

持ち上つたり、本年度のその大会主催地の島根県の保育会が板挟みになつて、来る五月末には日本保育連合会大会を、来る七月には厚生省後援の全国保育所大会を同じ松江市で準備することになつたりしている。

他方では正規の幼稚園ほどの規模、設備、教育力を持ってない場合にも、簡易幼稚園としてでも之を育成することが現実には必要な状態であるにも拘らず、新たに決定が予想される幼稚園設置基準は、このような事情にあり且つ幼稚園、保育所、保育園等が混在する現下の実情に眼をふさいだまゝで、相当に高い標準を考えており、その結果は今後は幼稚園の増設はもとより、既設の幼稚園維持すら困難ならしめるような形勢にある。

幼稚園と保育所の現在の在り方が、各方面に積々の不合理、不都合を生んでいることがわかつていても、この二つが簡単に一元化出来る性質でないことも明らかである。或は幼稚園も保育所も、なお所謂弁証法的発展をとけて性格を交えるべきかも知れない。

なににしても、保育関係者全体が問題を大所高所から眺め、虚心に協力して、より良い制度を生み出す努力が期待出来るものであろうか。